

交換留学報告書

* この報告書に記載される内容は多文化社会学部のウェブサイト等に記載いたしますので、予めご了承ください。

氏名	橋本 美海	学年(渡航時)	3 年
派遣先大学	ライデン大学		
国・地域	オランダ・ヨーロッパ		
派遣期間	2024 年 9 月	～	2025 年 7 月

履修科目

1 学期目	
履修科目	授業内容
Dutch: Writing/ Grammar 1A, Language Acquisition	各週に一度ライティング課題の提出が課され、返却されたものを自身で訂正し提出した。教科書に記載された基本的な文法と単語を用いて作成し、授業内容の発展と捉えることができた。各課題の文字数は最低(250～300 単語)と指示が出ていたため、長文を作成する練習になった。
Dutch Painting 1400-1950: Introduction to the Art History of the Netherlands, Cultuurwetenschap I	初期オランダ、ネーデルランド、フレミッシュの絵画を代表的な画家に振り分けし分析する。1400-1950 年と限定されてはいたものの、絵画をみる要点を順に学習することができた。またオランダ(ヨーロッパ)の絵画に多いアイテムや人間の意味合いを宗教、歴史的観点から学び、あるときは比較することが求められた。テストでは作品、年号、作者、技法これらすべてを幅広く問われるため暗記に多くの時間を費やした。留学時に美術館などへ赴く際により関心を持って鑑賞することができた。
Culture and Society of the Netherlands; An inside View	“水と生きる”というテーマのもとに、オランダと水が生活のレベルで如何に影響しているか事前の予習と座学で学ぶ。またグループの課外活動が成績の半分以上に反映され、活動時に動画を撮影した。
Dutch: Speaking/ Listening 1A, Language Acquisition I	実際の Speaking と Listening はテストでのみ試すことができた。講義中はテーマのテキスト問題に合わせてフリートークをすること会話力が培われた。長崎大学から使用していた教科書を前期でも同様に読み続けたためテーマ自体は 2,3 回目であったが、進行の具合が早く毎日1章ずつすすむため予習と復習が必須であった。
2 学期目	
履修科目	授業内容
Dutch: Speaking/ Listening 1B, Language Acquisition I	毎週の課題が課され、15-30 分ほどのビデオを視聴し問題に取り組んだ。1学期中はクラス内のオランダ語にヒアリングで完結していたが、ビデオを通してそれぞれの発音やスピードに慣れることに時間がかかった。
The Netherlands in Dutch Feature Films	週ごとにテーマが設定され(例:世界大戦)それにしたがった映画を視聴してレポートを書くという内容であった。講義中はレポートをもとに4人グループをつくり意見交換をし、ワークシートを埋める作業を行った。さらにはじめてオランダ語で論文を書く機会ができ、参考文献リストなど基礎的な部分からレポートの書き方を学

	んだ。最終レポートでは自身でオランダの映画作品を選択し、オランダの文化背景にちなんだ論文を制作する課題があたえられた。
Dutch: Writing/ Grammer 1B, Language Acquisition I	基礎的な部分から文法を学んだ。オランダ語の語学検定に出題されるレベルのあらゆる筆記問題を扱い、返却された用紙を見返して文法をなおすという作業をした。文法に関しての学習は家庭学習にふくまれ講義では主に生徒が質問した箇所のみ説明があった。
Dutch: Reading/ Vocabulary 1B, Language Acquisition I	毎週200単語ほど覚え、確認テストをとおして理解度をチェックするといった内容であった。実際の単語テストでは名詞、形容詞のほかに動詞の活用形が重視されており、Grammar の理解度も見極められていた。リーディングに関しては、長文(2-3 頁)を読むことが増え、辞書で調べなければならない単語が多く単語の授業と並行して行われた。毎週テーマごとに単語を学ぶので、それに合わせて新聞のコラムや過去に出題された問題例が提示され、15 分間自身で取り組んだのちにペアで再び取り組むといった学習であった。

留学レポート(1,500 字以上)

2024 年の 8 月に渡航し、2025 年の 7 月末にかけてオランダに滞在した。本留学は語学学習を柱とした内容であったが、自身はオランダ文化やその社会背景に関心を持つため現地での学びと生活を通してそれらを体感し、今後の学問的視野(卒業研究)や将来の設計に取り込むことを目的としていた。本レポートでは、留学期間中に実感した自身の成長と反省そのほかに、とくに印象深かった活動である「ジャパニーズ・マーケット」におけるワークショップ参加について振り返る。

留学の前と後で一番に成長したと思われるのは、行動力と責任感である。以前は面倒なことが苦手で問題がみつければ人に頼ることばかりしていた。渡航直後にある程度察してはいたものの、現地との相違や葛藤が少なくなかった。到着後1週間は市での手続きや証明書の獲得、そのほかに銀行口座の開設等多くのやるべきことに追われながらも、オリエンテーションに参加するといった忙しい状況下に置かれオランダを知る以前の問題であった。この際に直面した問題は、銀行口座の開設が中々すすまなかったことである。本来オンラインで申請が可能な手続きであるにもかかわらず、必要書類やパスワードが家に届かないといった問題に何度も悩まれ、現地のオフィスに何度も通う羽目になった。日本では電話一本で簡単に済ませていた問題も、海外では対面式に必要な書類や問題の証明を簡潔に伝える必要があり、自身で解決するという点に関してここでは実践的な理解が深まった。自身で解決することが出来たことで、些細な疑問に対して直ちに調べる癖がつき、以前とは変わり他の日本人学生や留学生をたすけることができた点もふくめて成長したと実感している。

責任感については、前期に開講された Dutch Culture and Society のグループ活動で培われた。日本でも授業の一環でグループワークをする機会は度々あった。しかし、すべてのメンバーが意欲的に取り組むことは難しく与えられたタスクの量や質からみてもすべてが公平であったとは言い難かった。本授業は留学生向けに開講されていたこともあり、人生で経験したことのないほど多国籍の生徒が一堂に会していた。グループワークの進め方にも違いがみられ意見交換の展開がはやく、役割やタスクにおける平等性も自身のグループでは重視された。日本では意見交換のなかでも学生同士での批判は少ない印象であったが、ここでは批判を「無礼」や「遠慮」といった行いとするのではなく直接的ではあるがアドバイスと受け取られることが非常に多い。さらにメンバーが請け負った課題をグループ内部のチャットで公開するたびに、自身のタスクの質にも変化がみられより上をめざすことができた。実際の内容は、「水と共に生きる」というスローガンを基本にオランダの各都市で課題解決やその背景をさぐるビデオを制作するといったものであった。自身は要ともなるビデオの編集を担当し、これまでの学生生活ではじめて使用するアプリケーション等を一から学び、使用した。またビデオの成績は教授からのフィードバックと学生からのランキングで決定するためかなり重大な役割であったと捉える。試行錯誤した結果、ランキングでは2位という好結果で終えることができたのも非常に満足している部分である。この講義を履修したおかげでよりよい人間関係を構築し、今後のグループワーク(就職活動)における取り組み方における姿勢をも学ぶことができた。

これらの行動力、責任感が最大に活かした場面として印象に残ったのは6月8日に開催されたジャパニーズ・マーケットでのブース運営であった。テスト期間に区切りがつき、帰国前に学生が主体となって活動できる機会がな

いか探っていたときに日本人学生としてオランダで培った会話力を試すことができたのがこのワークショップであった。企画が始動したのは12月のことであって、年に一度ライデン市の運河沿いで開催される日本の蚤の市で何かブースを出したいというアイデアを自身をふくめ2、3人の学生で日本博物館(シーボルトハウス)に提案した。日本博物館と提携を結んでいる出島でのアルバイト経験から国王の日に同様の企画を運営したこともあり、日本の文化体験を行うブースを学生内で話し合っていた。話し合いの結果、書道、折り紙、そろばん、けん玉で分け日本人学生と日本語学科に在籍するオランダ人学生のボランティアを募り運営する次第となっていたが交渉の過程で上手くいかないことが多々あった。特に書道ブースの計画では実際に体験することが可能ということを経験した最大のアピールとして持ち込んでいたが、急に筆を握る人々が館内を汚さないかまた衣服を汚してしまうのではないかという意見がでてはじめの方は見直しを検討されていた。そこからは簡易的なエプロンや周囲を新聞紙でまもることで避けられるという、私たち自身が日本の小中校での体験談をもとに説得することに成功し、無事に開催することができた。当日は 13:00—17:00 までの予定であったが、事前にSNSを通じてボランティアや博物館側が告知していたこともあり予定より1時間はやくブースを開くほどの盛況ぶりであった。なかでも人気を得た書道ブースでは外国の名前を漢字に変換し、漢字ネームをプレゼントする案が成功した。来場者が想定以上に多く休憩をとることも難しかったが、ここまで達成感を感じたイベントは留学中には無かった。留学以前からの経験をふたたび活かせることや企画を実現できたことに関しては1年間での集大成であったと考えている。

以上を踏まえて自身の留学体験は個人で行動することへの自信につながり、学習した内容は知識の積み重ねに留まらず実践することで意味をなすことが証明された。さらにオランダ留学以前に長崎で出会ったオランダ人学生との縁や彼らに対する恩返しができるのではないかと考えており、今後とも長崎大学とライデン大学との縁が続くことを願う。本レポートにおいてひとつ反省しなければならないことは当初卒業研究のテーマ探しをオランダと関連づけることに固執していたが、これに関しても考えに変化がみられた。留学生のおおくが自身の国をアピールすることや自身がワークショップを経験して感じた自国の素晴らしさを追究したいという思いからテーマに対する考えに“日本”を学びたいという意欲が現れた。帰国後は培った経験を学業のみならず就職活動や私生活において活かしていきたい。

留学中の写真(5枚程度) ※写真のキャプションも入れること



ライデン大学日本語学科の生徒たちと Keukenhof へ



前期終了パーティーにて先生と



ジャパニーズ・マーケットワークショップにて



同じく折り紙ブースの様子



オリエンテーションウィーク後の帰り道



はじめてのフルオランダ語での観劇



Culture and Society で訪れた Zaandam